

## 編集後記 — 紀要の志すもの —

浅沼 知行

(紀要編集会議 座長)

『神奈川県立図書館紀要』第9号の編集を終え、皆様にお届けできるところまで辿りついた。

この第9号の編集に当たっては、従来の当館紀要の伝統を踏まえながらも、第8号において初めて試みたスタイルを継承し、さらにその確立を意図して取り組んだ。その結果、「巻頭言」「研究論文」「研究ノート」「随想」「業務分析」「資料解説」という6つの項目を立て、それぞれ求められる新たな司書像や意欲的な新図書館論などの論文、業務記録や地域資料紹介、そして回想録などを得て、全体として、研究論文としても、読み物としても幅の広い奥行きのあるものとなるよう努めた。そうした編集のねらいがいささかでも成功し、県立の図書館の現状と課題、将来の展望に加え、様々な魅力を伝えることができたとすれば、それは偏に執筆者の丹精の賜物であり、日常の業務の傍ら傾注された努力に感謝したい。

従来の当館紀要の中には職員から自由に原稿を募集したこともあったが、今回の第9号では、第8号に引き続いて、すべて編集会議においてテーマを審議検討し、その執筆にもっとも適任の職員に依頼した。

また、特筆しなければならないのは、今回初めて県立川崎図書館職員にも執筆してもらったことである。川崎図書館ならではのテーマとして、全国に誇る社史コレクションを取り上げた。この試みは、9号を数える今回までなかったことであり、今後は両館で紀要を合作していくことも予感させる出来事であった。

ところで、当図書館の『紀要』はどのようなものを目指して創刊されたのか、この際少し立ち止まって、振り返ってみたい。

そもそも「紀要」、あるいは英語標記の“Bulletin”とは何であろうか。誰が、何を書き、誰に伝えようとするものなのか。試みに『広辞苑(第4

版)』に尋ねてみると、「紀要」とは「大学、研究所などで刊行する、研究論文を収載した定期的刊行物」と定義されている。また、“Bulletin”には「会報。定期報告書」などの意味があるようだ(『研究社新英和中辞典(第2版)』)。もとより県立図書館は大学でも研究所でもなく、県民への一サービス提供機関であり、その存立基盤に引きつけて考えると、「職員の日常の業務に根ざした研究活動の成果を定期的に報告する刊行物」としてよいであろう。そして、当館の『紀要』に歴代の館長が寄せた「序」に当たってみれば、辞書的な定義に命を吹き込む使命感と期待にあふれていることに気づく。その代表は、やはり創刊号である。

『紀要』創刊号(昭和60年3月)は、開館30周年を迎え、しかも大幅な機構改革を実施したばかりの時期に発刊された。その「序」によれば、機構改革は、「県立図書館の業務を根本的に方向転換し、県内の公共図書館の核としての中央図書館機能を推進するための図書資料の充実、レファレンスの強化とともに市町村協力事業の積極的な展開をはかる」ことにしたものであった。そして、このような県立図書館のあり方の転換を可能ならしめた諸条件の1つとして職員の研究活動をあげ、「とくに県立図書館の将来を見ずえて積み重ねられた職員の具体的な研究成果が今回の業務改革を可能にした」としている。さらに、「日々の研鑽を今日ほど必要としている時代はない。新しい知識を幅広く吸収し、研究を積み重ね、日常業務にその成果を反映させることが何よりも期待されている。」と『紀要』の意味づけを明確にしている。この「序」の言葉に代表される「志」は、当時の図書館という現場において時代の要請に応える改革に取り組む意気込みと雰囲気を感じて今日に伝えている。

こうして創刊されて以来、当館の『紀要』にはその時々多くの図書館員の弛まぬ努力と研鑽の成果が集積されている。日常の業務そのものの解説や、事業の歴史や経緯、改善に関する論文もあれば、業務を契機とした問題意識を掘り下げ、将来へのあるべき図書館像を展開する貴重な論文もある。さらには、本館に収蔵した地域資料を基にした研究・解説もある。しかしながら、中には図書館とは直接関係のない随筆や論文も散見される。いずれも、執筆者の思いのこもった作品であるが、当館紀要の目的に照ら

せば、自ずとテーマの選定や研究内容については、単に職員個人の研究成果ということではなく、図書館の活動に益することが期待されているのである。

当館は現在、設立以来57年となる施設の老朽化もさることながら、県立図書館と県立川崎図書館という2館体制のあり方の検討や、生涯学習情報センターにおける非来館型利用の促進などを課題としている。加えて情報化の目覚ましい進展に伴う図書館の電子化対応、市町村図書館の著しい充実など、県立の図書館をめぐって状況がたいへん大きく変化してきており、いわば生き残りをかけて、県立図書館のあり方について構想力が問われていると言っても過言ではない。県立図書館に働く私たち職員は、四半世紀前に『紀要』が発刊された時代と同じように「図書館の業務を根本的に方向転換」する覚悟で取り組むことが求められ、期待されている。わが『紀要』も、そうした時代の要請に応じて、創刊時の志に改めて思いを致し、県立図書館の役割やあり方を考える場としていく必要がある。

こうした期待に的確に応えていくためにも、日頃から実践活動に裏付けられた経験と理論を、図書館人として発信し続けていかなければならないだろう。まさに論壇は日常の業務の中にある。この『紀要』もそうした論壇の一つとして発信し続けていきたいものとする。

最後に、『紀要』第9号に執筆した職員の努力と研鑽にあらためて敬意を表するとともに、読者の皆様に今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。